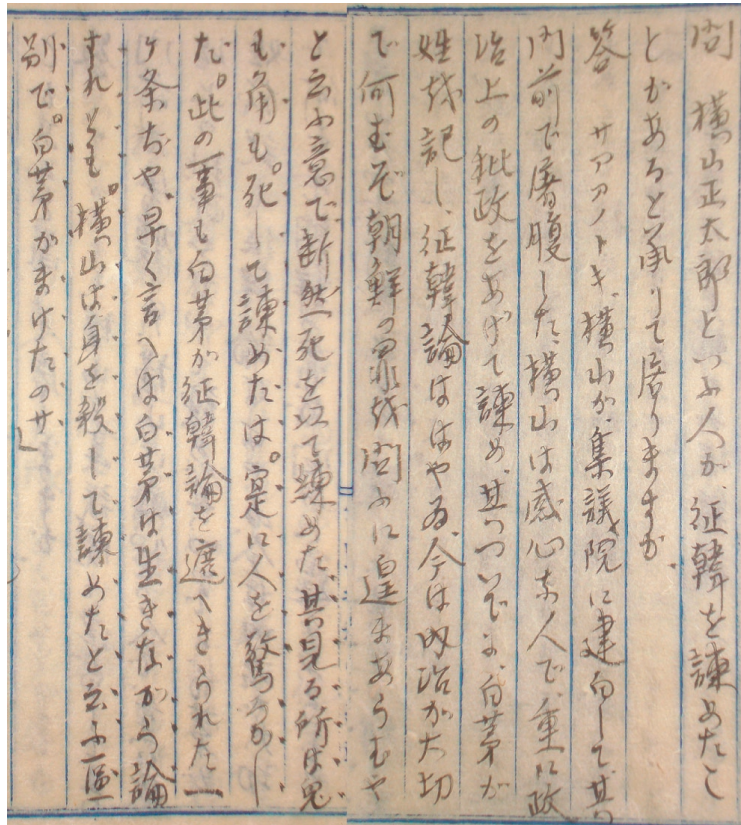


征韓論（佐田白茅と横山安武）



*毛利家文庫 75維新記事雑録204「征韓論の嚆矢」のうち、佐田白茅が横山安武（正太郎）の諫死とその影響について述べた部分。

解説

明治新政府の対朝鮮外交は、従来通りの交際を求める国書の受け取りを朝鮮側が拒否したことから紛糾していました。国交樹立の予備交渉にあたった外務省の佐田白茅（はくぼう）は、1870（明治3）年4月に帰国すると政府に征韓を主張する報告書を提出し、武力をもって朝鮮を開国させる必要性を諸方面に説きました。

一方で、薩摩の横山安武（正太郎）のように、新政府の腐敗と内治優先を説き、征韓論への反対を政府に建言して割腹するという壮烈な死を選んだ人もありました（安武はのちの初代文部大臣・森有礼の実兄）。

排日の風を強める朝鮮に対し、1873（明治6）年8月、当時留守政府の首脳であった西郷隆盛・板垣退助らは西郷の遣韓を決めました。9月に帰国した遣欧使節団の岩倉具視・木戸孝允・大久保利通らは時期尚早として反対し、大論争の結果、征韓論は退けられました。その結果、西郷や板垣、江藤新平、後藤象二郎らは一斉に下野し（明治六年の政変）、のちの不平士族の反乱や自由民権運動の起点となりました。

左の資料は、佐田白茅への聞き取りを速記した毛利家史談会の記録で、白茅が征韓論を唱えるに至った経緯や横山正太郎の諫死の影響、西郷と大久保の激論の様子とその結果などが述懐されています。

*征韓に反対した横山正太郎の建言（写）は、「鹿児島藩横山正太郎建言」（毛利家文庫 75維新記事雑録392）で見ることができます。